施工者に幸あれ 第100回

SDG模型番長から構造デザイナーへ

構造家・中田琢史

朝倉幸子◉TH-1
illustration：Taco

■東京造形大学

リズムデザイン構造計画事務所を主宰する中田琢史さんは，少し変わり種の構造家だ。ともに教師だったご両親から1967年に誕生した。愛息にも同じ道を目指して欲しかったらしい。しかし，進学校の四日市高校に通いつつ，受験に背を向けて東京造形大学絵画科に入学。学舎は建築家の磯崎新さんが設計するキャンパスへと移動するはずだったが，卒業まで完成しなかった。中田さんはマックス・ビル（建築家，プロダクトデザイナー）が学長を務めたウルム造形大学を模した旧キャンパスも好きだったし，バウハウスに傾倒しながら自由な学生生活を過ごしたという。「一般的な美術大学という枠を超えてデザインと技術を造形という広い観点から総合的に捉える」（東京造形大学HPより）学校。しかし，絵画科非具象コースを専攻しながら，「社会にかかわりたい，デザインがしたい」と中田さんの心は悶々としていた。

■SDG大学

建築を専攻していないのに，大御所構造家の渡辺邦夫先生（本コラム第78回に登場）率いるSDGに行けたのは何故？　真相はSDGで模型づくりのアルバイトをしていた学友が辞めるので「誰か連れて来い」との渡辺先生のお達しがあったからだった。大学でも絵画の勉強より，形態論や生物学，規範がはっきりしている分野に興味をもっていた。だから「SDG大学！」で来る日も来る日も模型制作に熱中。図面を読むところから指導してくれた先輩のお陰で構造的に成り立つ建築模型をつくるまでになった。「中田クンの模型はプロジェクトが終わってからできるね」と言いながらも，渡辺先生は中田さんを「のんびり見ていてくれた」。プレゼン段階で，模型で建築家を説得できる中田さんに一目置いてくれていたのでした。SDGが南麻布に事務所のあるころ，覇志堂はよく通っていたから，現在活躍している構造家たちの席までも覚えているという。東京フォーラムの模型をとおして建築家のラファエル・ヴェニオリとの交流もできるなど「模型番長」として皆からチヤホヤされていた中田さんなのでした。

ある日，初構造担当として一番小さい建物を任せられる。小さいとはいっても12,000m²。そこから構造の基本実務をマスターするという泣きながらの修業が始まったのでした。その後，韓国のスタジアムの設計監理で3年の年月を過ごし，構造デザイナー中田琢史さんが誕生した。

■幸運な建築家との縁

一番の幸運は渡辺邦夫さんとの出会いだが，槇総合計画事務所の鹿島大睦さん（現・副所長）が忘れられない恩人だ。幕張メッセ北ホールで設計監理者だった鹿島さんは，設計者を差し置いてデザインが良いの悪いのと言い出す中田さんにビシッと意見した。竣工のころにやっと「写真がいい」といわれて嬉しかった。「安曇野ちひろ美術館」（本誌1997年8月号）で建築家・内藤廣さんと仕事ができたのは自分の宝だという。憧れ尊敬する建築家に20代で指導を受けられたのだから。中田さんが設計した前芝中学校体育館（本誌2016年10月号）など木造の仕事が増える今，日々感謝を感じている。千葉大学や中部大学で非常勤講師をする中で，いつも若者の言葉に耳を傾けているから中田さんは現実味のある言葉がでる。名古屋と東京，山形に拠点を持つのは生きた情報をつかまえるためだ。

「音楽は空間」と，リズムに乗って構造界を動くのが中田流で，社名の由来です。建築設計の未来に危機感を感じて「行動しなければ！」の思いが湧いている。今後は「改革番長」としてご活躍を願いましょう。